

# 治郎吉格子

吉川英治

青空文庫



## 立つ秋

湯槽ゆぶねのなかに眼を閉じていても、世間のうごきはおよそわかる——。ふた月も病人を装って辛抱していたこの有馬の湯治場とうじばから、世間の陽あたりへ歩き出せば、すぐにあしをつくというくらいな寸法は、なにも、気がつかずに立った治郎吉じろきちではなかつた。

素す裕あわせの肌こごこちや、女あそびを思わせる初秋の風は、やたらに、治郎吉を退屈そその殻から唆そそつた。

——で、無性むしやうに、あぶない世間が恋しくなつて、有馬の槌屋つちやを立ったのが七十日ぶりの爽やかな秋の朝で、湯治中すつかり馴

染になった湯女ゆなのお仙が、彼の振分ふりわけを持って、坐頭谷まで送ってくれた。

「もうこの辺で結構だ。お仙さん、また来年会おうぜ」

治郎吉がいうと、

「いえ、武庫川むこがわまで」

と、お仙は、いつまでも振分を渡したくないように抱えこんで、螢草の咲く道をふんでいた。

「おこころざしは有難えが、そいつは、かえって名残がますというもんだ。宿でも、変に思うといけねえから、ここらで、帰った方がいいぜ」

「——だから、旅のお客は、たよりが無い」

「どっちにしても、生涯、有馬にいるわけにはいかねえもの」

「わたしも、江戸へ、連れて行ってくださいな」

「じよ、じようだんだらう」

「ほんとにさ！　ね、治郎さん」

人通りが絶えていた。女は、ついと小戻りをして、治郎吉の<sup>あわせ</sup>裕の<sup>たもと</sup>袂を、ねじきるようにつかんだ。

「……ね、治郎さん」

「よせやい」

胸へ、もつてくる顔を、邪慳<sup>じゃけん</sup>にかかえて、

「みツともねえ、泣くやつがあるもんか」

「わたし、行きたい」

「どこへ」

「どこへでも、治郎吉さんと、いつしよにさ」

「そんな約束じゃなかったぜ。……さ、人が通ると、評判になら

あ、はやく、帰けえンねえ」

「嫌いや！ ……わたしは急に、帰るのが嫌になった。連れて行って

ください、どこへでも」

「わからねえことを言っちゃ困る」

「だって、お前さんの足手まといにさえならなければ、いいんでしよう」

「そうはゆかねえ」

嘆ためいき息のように言ったのである。

ありふれた湯女とお客の御多分なみに、ほんの、退屈まぎれな、いたずら心でした事を、軽く後悔するように。

第一、相手の女にもよる。こう、後腹あとばらを痛めるほど、値うちのあるきりようとは、惚れられている彼の眼にも踏めていなかっ  
た。

「帰けえんねえつてことよ」

振分をもぎ取つて、治郎吉は、先へ歩きだした。

女は、黙つて、武庫川の見えるまで尾ついて来た。——ちツと、舌うちを鳴らしながら、

「お仙、どうしても、帰けえらねえのか」

「……………」

「おめえはまだ、おれの、ほんとの素姓を知らねえからそう慕つてくるんだ。実あ、おらあ江戸をずらかつて来た兇状持ちだ。悪いこたあいわねえから、おれと、なんかあつたなンていうこたあ、<sup>おくび</sup>曖にも、<sup>ひと</sup>他人にいわねえ方がおめえのためだぜ」

「そんなことは、とうに、知っています」

女は、驚きもしなかつた。

「えつ、知ってる？」

「有馬へだつて、何度、お役人や人相書が廻つて来たか知れませんもの」

「ふーム」

「そのたびに、わたしだつて、<sup>つちや</sup>槌屋の御亭主に、ずいぶん腹を探

られていました。いちどなんか、自身番まで呼ばれて、たたかれましたことだつて、あるんです」

「じゃ、おれが、盗ぬすつ人だということ承知のうえで」

「え。わたしは、惚おぼれているんです。江戸をあらした鼠小僧の」

「しつ……」

口軽い女の二の腕を、ふいに、男の指が突いた。ぞろぞろと、渡舟わたしを下りた旅人たちが河原から上つて来たのである。治郎吉は、お仙のからだを、からだで押すように、足を早めて、

「——乗りねえ、ちようど着いた、あの渡舟わたしへ」

いろもとい  
色元結

パチ、パチ、と音がする。中で、将棋しょうぎをやっているらしい。

「ははあ、此家ここだな」

と、治郎吉は、立ちどまって、髯ひげの伸びた顎あごをなでた。

太左衛門橋の河岸ぶちである。道頓堀どうとんぼりがわ川を隔てて、芝居茶

屋のお内緒の桐箆きりだんす筒や、赤い座ぶとんや、長火鉢がのぞかれる。

秋の陽がからんと、明るく映さしているその家の土間障子には、大

きな奴やつこまげ鬚じらいやどこと、そばに自雷也床と書いてあった。

「ごめんよ」

がらりと開けて、棒立ちに、

「すぐ、やって貰えますか」

「お掛けなさいまし」

したぞり下剃が、腰の掛け場を片づけて、

「さかやき月代ですか」

「なに、こいつあ、このままでいい。髯だけだ」

「おひとり様だけ、お待ちねがいます。ま、いっづく、お吸つけなすつて」

煙草盆を、そこへ出して置いて、下剃は、流し元で、青砥あおとをすえて、ごしごしと、剃かみそり刀を磨とぎはじめた。二階がやわなので、地震のように、家がうごく。

治郎吉は、真しんちゆう鍬のべで、すぱりと、一服くゆらしながら、

家のなかを見まわした。床屋といえ、江戸も上かみがた方も、似たり

よつたりなものだった。隅では、一組、将棋盤をかこんでいる。壁には、三座の絵番付やら、しろとうじょうるり素人浄瑠璃のビラなどが、辻便所ほど貼りつけてあつて、そのまえに、油染みた桐の櫛箱くしばこや、鬢びんだらいなどをすえつけて、今、一人の客の髪を結い上げているのが、親方の仁吉にきちらしかつた。

二十七、八の苦みばしつた男である。胸から二の腕にかけて、がまはだ藁がまの肌のように、入墨のぼかしが見える。その背なかに彫つてある自雷也が通称になつて、自雷也床の親方で通つてゐる彼だった。「……ちつとも、似ていねえな。腹ちがいにしても、兄きょうだい妹いなら、どこか似ているところがありそうなものだが」

治郎吉の眼は、煙草たばこのけむりの中で、そう見ていた。湯女ゆなのお

仙から、兄の仁吉が、太左衛門橋で、髪結床をしているというこ  
とは有馬の逗留中に、度々聞いていたが、今日ここへ来たのは、  
伸びた髯を剃るだけの用事ではなかった。——旁 《かたがた》、  
彼女からすが縫られたある問題のかたをつけるためだったが、ほかの  
客がいては、ちよつと、話のぐあいが悪いのである。

ま、髯でも剃っているうちに、ほかのてあいも帰るだろうと、  
腰をすえていると——

「お待たせいたしました」

と、仁吉の眼が、はじめて、治郎吉をふり顧つた。

「もう、私の番ですか。先のお客があるんでしょう、どうぞ」

「なに、旦那」

と、仁吉は、銀歯をちらと見せて、

「あの通り、夢中なんですから……」

と、将棋の一組を顎あごで指して、苦笑いをもらした。

「そうですか、じゃあ」

と、梳すき場ばへ腰を持ち上げて行ったものの、実は、治郎吉にとつては、後の方が都合がよかつたのである。

仁吉はもう、鬢びんだらいの湯を代えて、下剃したぞりから剃かみそり刀をうけながら、

「旦那、江戸ですね」

「わかるかい」

「わかり過ぎますあ」

「江戸の野郎はがさつだからね」

「なに、その齒切れのいいところですよ。上方の女が好くはずです。……何ですか、御見物かなにかで？」

「ま、そんなものさ。金比羅こんびらから、有馬にすこしばかり落着いて、御多分にもれない、上り大名の下り乞食」

「そういう乞食になら、あつしも、稀たまにやなつてみたい。有馬では、どこへお泊りで」

と、仁吉は、天井から、治郎吉の顔を見直していった。

この緒いとぐち口に、お仙の話を匂わせてみようかと、治郎吉は、次のことばを喉まで出しかけたが、やっぱり、人がいては、まずい気がした。

——というのが、自分よりは、向うにとって、余り人聞きのいい懸合ではないからだつた。お仙の話によると仁吉と彼女とは、腹ちがいの兄きょうだい妹いで、この兄貴は、かなり、極道者で通つていゝる男らしいのである。

で、湯女奉公をしている彼女へも、常々、小銭の無心は珍しくなかつたが、こんどは何かまとまつた要いり用ようがあるとかで、守もりぐ口の双葉屋ちという遊女屋から、お仙のからだを抵かた当たに、百両ほど借りてしまった。——ついては、槌屋つちやから暇をとつて早速歸つて来いという話が来たために、治郎吉の立つ四、五日まえから、お仙は、眼を腫はらしていた。

気まぐれが、また、気まぐれを生んで、先はどうでも、こつち

では、さほどにも考えていない女を、つい、あのまま、この大坂まで連れて来てしまった治郎吉が、後で、こうと打ち明けられてみると、恋ばかりではない女の気もちに、その時は、ちよつと、興もさめたが、また、抛つてもおけない彼でもあつた。

——よし。おれが、話してやろう。

と、ちよつと伸びた髯ひげをだしに、それとなく、様子を見に来たわけだったが、仮に、相客がいなくて、すぐ問題の話にかかつたとしても、相手の仁吉は、ちよつと拇おやゆび指と人差指で、抓つまんで食うようなわけには行かない男だと彼は睨にらんだ。相当に、小悪党らしい小骨が齒にも、舌にも、かかりそうに思われた。

「——こんにちは。親方さん、元結もとむすはまだでございますか」

そこへ、若い女の声が出た。外の陽が、治郎吉の仰向いている顔へ映した。

仁吉は、剃かみそり刀を止めて、

「あ、お喜き乃のさんか。待っていたんだ。——はいりな、そこを閉めて」

「まいど、有難うぞんじます」

「だいぶ、お世辞が、うまくなつたな」

「いえ、まだちつとも、商あきな売に馴れませんで」

「さ、荷を下ろして、そこへ掛けな。馴れねえ商売つてものは、気づかれのするもんだ」と仁吉は、治郎吉との話をけろりと、忘れッ放して——「元結もきれたから貰いてえし、ほかにも、ちよ

つと話があるんだが、このお客様のすむまで、しばらく待つてくんな」

「はい。ごゆつくり」

と、お喜乃は元結箱を下ろして、陽にあたつて来た鬢びんの汗を、そつと小菊紙こぎくで抑えていた。

仁吉に、顔をまかせながら、治郎吉の眸は、眼の隅へ寄つて、お喜乃の方へながれていた。——見ると、これはすばらしい、十九か、二十歳はたちくらい、単に、きりようが美しいというばかりでなく、品がいい、髪かみの毛がいい、唇くちびるがいい、眼まなこもとがいい。

それに背や、肉づきまでが、治郎吉が描いて持つている好みにぴったりと来ている。彼は、とても、お仙の比じゃないと思つた。

——どこの娘じやろう。剃刀の刃が、髯ひげの根ねを、気もちよくとおつてゆく音を聞きながら、そんなことを考えはじめた。

——この年ごろで、木綿帯は可哀そうだ。着物もそまつだし、やすぐし安櫛やすぐしをさして、なりにもふりにも関かま心かまわないでいるところは、問うまでもなく、貧乏人だ。そして、床屋廻りの元結売りをしているといふ事はわかるが、根からの、裏うらだな店うらだな育うらだなちとは、思われな  
い。

——惜しいもんだ。

と、治郎吉は考えるのだ。同時に、有馬の気まぐれが、よけいに馬鹿らしくもなるし、一步まちがえば、あぶない体でこんな所へ、お仙から頼まれて来たことも、軽い後悔になって来た。

「おらあ、止めた……」

肚のなかで、治郎吉は、呟いた。

「お待ち遠さまで」

と、仁吉は剃り上げた剃刀の毛を、指でしごいて、

「松、洗い水を」

と、したぞり下剃へ吩咐いいつけた。

だが、すつぺりと剃り上がった顔を撫でて立ったとたん、治郎吉のするどい感覚が、きよ恟ツとして、うしろへ走った。

店と奥との、なかじきり中仕切の内緒暖簾ないしよのれんが、彼の眼が走ると共にう

ごいていた。そして、その暖簾の下に細かい茶縞の着物の裾と、

ぬりざや塗鞆こじりの大小の鐙が、ちらと見えて、すぐ消えた。

「おっと、下剃さん。どうせ、風呂へゆくから、洗い水にや、及ばねえよ」

抛るように、髪結銭をおくと、治郎吉は、われながら、慌てずぎると思ひながら、さつと、土間障子をはやく開けて、往来へ、出てしまった。

ゆうがらす  
夕鴉

二度も三度も、彼はうしろを振り顧りながら走った。往来の人の声が、みんな、鼠小僧、鼠小僧と、指さすように、思われた。わざと、道頓堀の人混みへはいつて、細い路地から千日原まで

抜けて来た。そして、はじめて、まめしほ豆絞りをつかんで、わきした腋の下の汗を拭きながら、

「ああ、びつくりした」

と、呟いた。

齒磨き売りや、古着屋や、野天にいろいろな露店が出ていた。

治郎吉の眼は、まだ落着かず、そんなものにまで、気をくばりながら、草むらへ、手拭を敷いて、両膝を抱えこんだ。

「はてな……」

来たら——と脇差のこいぐち鯉口を切つて、逃げる先の先まで、微細な工夫をしていたが、こう見まわしたところでは、ひとりとして自分へ向つて光つて来る眼はなかった。岡ツ引くさい者も、捕手

くさい人間も通りはしなかった。

「こいつあ、大笑いだ」

治郎吉は、自分へ嗤わらった。

「ふた月も、稼かぎを忘れて、爛かんどくり徳利みてえに、湯にばかりつかつていたせいか、俺も、すこし焼やきが戻かえったよ。……だが、驚くのも無理はねえ。床屋の奥に、紺足袋こんたびで、茶縞ちがの侍と来た日にや、誰たれだつて、脛すねに傷のあるやつなら、奉行所風ぶぎやうと思うのは当りめえだ」

しかし、それはまったく、勘違いだと彼にも分わつた。治郎吉は、自分の早合点はやあてがおかしくなると共に、あの侍は、何者なにものだろうと考かんえた。居候いこうにしては、刀が上物じやうぶつすぎるし、着物きりぎりすも渋しぶい。床屋どやの客

にしては、奥にいらつというのが変だ。

それと、彼は何よりも、お喜乃という、あの元結売りの娘が眼に残つた。お喜乃と、茶縞の侍と、自雷也の入墨とをむすびつけて、考えた。なにかそこにあるような気がしてならなかつた。

ちよつと、諦めきれないあきら気がする。お喜乃の住居すまいだけでも知りたい気がするのである。これも、彼の持ち前な気まぐれの一つかも知れないけれど、今まで経てきた女へ対するものでは、もつとも、根強い気まぐれに違いなかつた。

「ごめんよ」

彼はまた、とある床屋へはいつて行つた。床屋の男は、治郎吉の剃つたばかりな青い髯痕をながめて、ふしぎそうな顔をした。

「——なにか、御用ですか」

「てまえは、江戸のもんですが」

「ああそうか」

と、床屋は、草鞋わらじせん錢を鼻紙につつまかけた。

「待つとくんない。あつしやあ、渡り職人じゃありません。実あ、知り人を尋ねて来たんですが、その人の娘が、床屋廻りの元結売りをしていると聞いたんですが、もしや所を御存じじやありますめえか」

「へエ、何ていうんですか」

「若い女で、お喜乃さんというんですが」

「お喜乃さんなら、天王寺裏のお鉄漿はぐる長屋に住んでいる、感心な

娘さんだ。何でも親父さんは、御浪人だということを聞いていました」

「そうそう、それに違いねえ。いや、大きに有難う」

すつぱりと、こだわりの霽はれたように、治郎吉は宿へ帰りだした。旅宿はたごは北久太郎町の鈴木屋、お仙といっしよに、その裏二階に、十日あまり泊っていた。

裏二階の下は東堀。思案橋を隔てて、川向うはすぐに、西奉行所だった。女とふぎけながら、治郎吉はそこからよく奉行所の屋根にとまっている鴉を見ていた。

「おや、お帰り」

お仙は、風呂から上がって、こつそりと、厚化粧をしていた。

膳も来ていた。長火鉢もきれいに、すっかり、女房気どりである。

「兄さんはいましたか」

「いたよ」

「話は」

「止めにした」と、あぐらをくんで、「仁吉はいたが、少し考え直して、おめえの話は、出さずにしまった。なあに、抛つときやあいい」

「よかあないんですよ。こうといたら、どんなことをしても、きつと我がを通す兄なんですから。その話のかたがつかないうちは、恐くつて、私は、外へも出られない」

「べら棒め。三都はおろか田舎城下いなかにまで、人相書の廻っている

この治郎吉ですらこうして、真つ昼間、大手を振って歩いて来らあ。……なんだ、多寡たかの知れた」

お仙はちよつと、暗鬱あんうつになった。

治郎吉は、膳の盃にも手が出なかつた。窓の肱掛ひじかけへもたれて、女の憂鬱を慰める責任も感じないように、思案橋の往来をながめていた。

お仙は、いきなり、ヒステリックに男の膝に寄つて、

「治郎吉さん」

「よせ。泣いてばかりいやがる」

「だつて……だつて……一日増しにおまえさんが、私に冷たくなつて行くんだもの」

「へえ、いつおれが、おめえに熱かったことがある？　俺は、初めからこの通りだ」

「いいえ、違って来ています。このごろはもう、前みたいな、優しいことばなんか、薬にしたくも……」

「おいおい、てめえは一人で、何か、夢を見ているんじゃないか。何も俺が誘拐かどわかしたわけじゃあるめえし、嫌なら、いつでも帰るがいいぜ」

「その口が、私は、私は、口惜しい」

「何……てやんで」

治郎吉は、突っ放して、ことさら、錐きりのようなことばで、

「てめえは、熱病にかかっている。のべつ、あぶねえ風をくぐつ

て、世間の裏をあるいているお尋ねもんが、いちいち、ねちねち、色恋にしろ、捏ね返しこかえしちやいられるもんけえ、飽いたら、別れるまでのことよ」

窓がまちに、頼杖をのせて、東堀の水に、眼を落した。西奉行所の黒い屋根に、きょうも夕鴉が啼からすないていた。

「鴉啼からすなきが悪い……」

その時、襖ふすまが開いた。

「まいにち御退屈様で」

「あ、番頭さんか」と、ちよつと、膝を直して——「勘定だろう」と、先手を打った。

「へ。毎度うるさく申し上げて恐れ入りますが、帳場の方で、い

ちど、お極りをつけて戴きたいと申しますんで」

「あ、いいとも。だがきようは少し都合がわるい。知り人の家をたずねたところが、生憎あいにくと留守でな」

「それでは明日あすには、ぜひともひとつ」

「くど 諄くどくいいなさんな」

客の顔いろを、敏さとく見て、

「今夜は、お酒は」

「お、膳たまが来ていたのか。酒はいらねえ。宿屋の飯にも飽きたから、稀たまにや外で、何か美味しいものでも拾い食いしてみたい」

番頭がもどるとすぐ、治郎吉は、一枚かんばんの素す裕あわせを着直して、きゅつと、帯を鳴らした。

「お仙、行って来るぜ。不味まずかろうが、飯はひとりで食くってくん  
な」

「どこへ」

と、彼女の眼には不安があつた。

「どこつたつて、べら棒め、白浪しらなみの行く先が**い**えるもんけ」

とん、とん、とん、と梯子はしごを下りて行つた。

## 川波

「——秋だよ。治郎吉が金に乾ひあがるなんてこたあ、近年珍しい  
秋かぜだ」

と、治郎吉は、自分のふところの空虚を嗤わらいながら、あてもなく、宵を歩いた。

今夜のうちに、その工面を、どうかしなければ、旅籠はたごからぼろの出る惧おそれがある。——だが、いくら詰つても、江戸の鼠が、上方でケチな仕事をしたとは人にいわれたくない。

女に気まぐれで、仕事に見栄坊な治郎吉だった。彼が好んで、大名の屋敷にはいるのは土蔵の現金と、閨房ねやの上淫がのぞかれるからであった。武家、旗本の屋敷を選んでいるのは、比較的そういう階級の方が、町家の家庭よりは、生活がみだれているし、権門を恃たのんで、かえって彼等に、不用心が多いからである。

何かそれを、武家階級に反抗する特殊な思想的泥棒のように、

ふしぎと、世間の人気は盗まれた方へ寄らないで、盗む鼠の方を礼讃しはじめたので、治郎吉はすっかり、自分の職業に信仰をもつてしまった。女と、ばくちの費い<sup>つか</sup>残りを、貧民街に少しばかり撒くと、たちまち、義賊という名が、鼠の肩書に、位階のように名づけられても来るし……。

だが、その江戸を食い詰めて上方落ちを極めてからは、華やかな悪運も、そういう目ばかりは出なかった。人相書こそ廻っているが、江戸で仕事をするほど、反響はない。鼠の人気も、無論なかった。

なければこそ、悠々と、宵の町を、ふところ手で歩けるのだけれども、それもまた、治郎吉には淋しかった。

彼の特徴のある草履の音は、ぴた、ぴたと何時のまにか、辻つじあ行燈んどんの灯よりしかない屋敷町を歩いていった。

ふと「洗心洞塾舎せんしんどうじゅくしゃ」という看板が眼についた。

「洗心洞」

聞いたような名である。

「あ、そうか。有名なる大塩中ちゆうざい齋さいの屋敷だな。するとこの辺りは、与力町と見える」

歩いているうちに、同じ程度の構えの、とある屋敷へ、新町と書いた提灯ちようちんをつけた駕籠が、三挺、横づけになって、潜りくぐの中へ、人影を送りこんだのを、治郎吉は、物蔭から見ていた。

一挺ちようとうには、仲居なかいか、芸子か、とにかく送って来た女らしいのが、

門にははいらずに、見届けて、そのまま空駕籠といっしよに、引返して行つた。

「よし、仕事は、あの屋敷と極まつた」

治郎吉は、呟いた。——主人が遊里から遊び疲れて帰つた家などは、彼にとつて、またとない仕事場だつた。そういう屋敷へはいつて、失敗した例はほとんどない。

草履をたたんで、腹巻と帯のあいだへ。そして、彼は、ぽんと、塀の見越みこしへ跳び乗つた。——後は、音もしない。

中で、ゆつくりと寝こみを待つ考えなのである。

泉水がある、築山つきやまがある。庭は、松が多い。かなり清楚せいそな、

そしてひろい庭である。

屋敷のひろい割あいには、女気は乏しいらしい。厨くりや、風呂場、座敷、どうもそういう匂いがする。治郎吉は、すっかり夜更よふけの成算を立てて、奥の書院らしい、一間だけ灯のともっている座敷の縁下に、屈みこんでいた。

「ウ……聞いた声だ」

彼は、すぐ感じた。——それも生々しい記憶だ。

その男が座敷のうちで、いうのである。

「——旦那、もし、重松しげまつ様。うたた寝をなすつちや困るじゃございませんか。ここはもう新町じゃございませんぜ。夜が更けますから仁吉も、お暇をいたします」

「……なんじゃ、帰る？」

これは酔っている。ひどく、ろれつが廻らない。

「仁吉」

「へい」

「帰ってはならん。ならんぞ」

「だって、旦那」

「ならんと申すに。女は、いかがいたした。女を連れて来い。女を」

「仲居は、御門前まで送って来て、もう帰りましたんで」

「あんなすべたではない。お喜乃をどうしたというんじや」

「どうも、弱りましたなあ」

「なにが弱る。そちが、たしかに、ひきうけておるのではないか。

——連れて来い」

「でも、先は何しろ、しろうと素人ですから、そう御短気に仰つしやつても」

「たわけが！」

起き直つたらしい。体の大きな侍とみえて、治郎吉の鬣まげに、床の塵が落ちた。

「昼間なんといった。今夜のうちには、何とかすると申したではないか。先の娘へ百金、そちの礼に二十金、金もたしかに受け取つたであろうが」

「ま、旦那、そう筋を立つちや困ります。金はたしかに、夕刻、お喜乃の家へ行って渡しましたが、何しろ、うぶでき、恥かしく

て、茶屋へなんぎ、行かれないというんです……そうした女の気もちも、少しや、考えてやっておくんなさいな」

「だから、ここへ連れて来いというのだ」

「もう何しろ、遅うございます。それに、彼女あれの親爺が長わづらいで、床についているところですから、もう四、五日のところ、折を見てやって下さいまし。きつと、仁吉が、腕にかけても、嫌たあ、いわせません」

「きつとか」

「あれだ……。旦那ときたひにや、まったく邪じやすい推いぶけえんだから」

「よし。では、日限三日かぎりだぞ」

「これや、きびしい。そのかわりに旦那、あの方もひとつ、ぜひ、お願いいたします」

「なんだ、あの方とは」

「お忘れなすつちや困りますぜ」

「ム。町役の株か」

「へい。旦那のさしがねで、十手じつてあず預かりにして戴ければ、これから先、どんなことにも、お尽しができるだろうと思えますんで」

「そんなに十手が持ちたいのか」

「町内で、幅がききますからね」

「何とかしてやる。しかし、お喜乃をはやくどうかしろ」

「よほど、お気に召したとみえますね」

「ちよつといいぞ」

「ちよつとですか」

「うるさい。帰れ」

「やつとお暇が出た。——じや明晩にでもまた、お喜乃の家へ行つてみますから、その返辞次第で、お伺いいたします」

自雷也床の仁吉だった。こういつて、彼が帰つてゆくと、間もなく、寢所へ、召使が出はいりして、雨戸が閉まった。

それから、一刻いっときばかり間をおいて、治郎吉は仕事にかかった。彼の通つたあとには、足跡もなかつた。大工が建具をいじるように、楽に戸を外して、後まで、きちんと、閉めて出て行つた。

旅館やどへ帰るには、遅すぎるし、歩いて時をつぶすには、早すぎ

た。治郎吉は、手拭にくるんだ重い金を、ふところ手で、臍へその上に抑えながら、天満河岸をぶらついて、川の中をのぞいて歩いた。

「ちよいと……ちよいと……お兄さん」

橋の下から、石垣の蔭から、時々なまめ艶かしい鼠ねずみ鳴きが聞える。

白い、手が招く。

船まんじゅう、という、売女たちである。——治郎吉は、そのいっそう一艘とまの苦の中に隠れた。そして興味も、素ツ気もない、女を買つて、とうとう川波に夢を揺られながら、お喜乃の顔を描いていた。

## 路地の闇

ちようど、昨日きのうと同じ黄昏たそがれごろ、治郎吉はまた、宿の鈴木屋に、お仙と夕飯の膳をのこして、出かけて行つた。

今朝、藍あゐみじんの裕あわせえりの襟えりに、白粉おしろいつぽい物がついていたので、お仙は、一日ふさいでいた。男が、軽くあしらえばあしら扱あうほど、女は焦しれて、粘ねつて、そして、錯覚さくかくに疲れた。

「こんな男だよ、俺は」

——出がけに、治郎吉がいった。

「いつまで、付ついていたつて、面白くもあるめえ、火鉢ひきだしの抽斗ひきだしに百両入れておいたからそいつを、兄貴あにいにくれてやつて、有馬うまへ帰るとも、身の振り方まわをつけるとも、いいようにしたらどうだ」

外に出ると、彼はすぐに、辻駕籠を呼んだ。

「——やってくれ、賑にぎやかな所まで」

法善寺横丁で、いっぱい飲んで、治郎吉はすっかりいい気もち  
……。

道頓堀の人混みを縫う。

それからまた、ぶらぶらと、天王寺まで歩いて行つた。お鉄はくろ漿  
長屋というのを聞いてその路地をのぞいてから、少し、酔がさめ  
加減だつた。

暗い、狭い、どぶ板をふんではいると、突き当りに、藪やぶがあつ  
た。藪に添つて、また長屋がある。

「ここだな」

角<sup>かど</sup>の竹窓から、そつと覗いてみると、奥に病人の寢床が見えた。煤<sup>すす</sup>けた行燈<sup>あんどん</sup>のわきに、自雷也床で見たあの娘が、枕元<sup>まくらもと</sup>に、しょんぼりと、袂<sup>たもと</sup>を嚙<sup>くは</sup>んで、俯向<sup>うつむ</sup>いている。

「……あ。来ていやがる」

治郎吉が、そう見たのは、うしろ向きに坐り込んでいる客だった。ゆうべも、声を聞いた床屋の仁吉にちがいがいなかった。

「どうだね、お喜乃さん。諄<sup>くど</sup>いたようだが、決して、悪いこたあすすめねえから、とにかく四、五日お屋敷へ、勤めてみちやあどうだい」

仁吉は、しきりと、雄弁をふるっていた。その話の内容がどんなものかは、治郎吉には分りすぎていた。

お喜乃は、病人を憚はばかるように、

「親方さん、もうその話なら、なんと伺つても同じですから」

「嫌かい、やつぱり」

「いくら先様が、立派な武家様でも、妾奉公などということとは、父が承知するはずもございませんし、私も、死んでも……」

「おつと、待ちな。……だが、俺がちらと聞いた噂によると、おめえは、何か纏まとった金の要り用があつて、新町の紅梅から芸妓げいこに出るといふ話じゃねえか。芸妓になるがいいか、与力衆しげまつの重松しげまつ左次兵衛様のお世話になるのがいいか、それくらいなこたあ、比較くらべてみたつて、分りそうなもんだが」

「ま……誰にそんなことを、聞きましたか」

「それや、おめえの世話をしようという以上、身許から内輪のこ  
とまで、すつかり調べねえでどうするものか。紅梅から百両借り  
る約束をしたろう」

「親方さん、まだ病人には、聞かせてないんですから……」

と拝むように声を制す手へ仁吉は、五両の封金をにぎらせて、

「旦那からだ、いいかい」

「あら、いけません、こんなものを」

「取っておきねえな、折角、支度金にくれたものを」

「いけません、いけません」

「とにかく預けておく」

と、仁吉はもう、下駄をはいていた。

「——あれ、親方さん」

と、お喜乃は、あわてて、金を持って外へ出て来た。どぶ板を踏み鳴らして、往来まで追い駈けて行った。

「甘い手だ」

と、治郎吉は、暗がりから見送って、すぐその眼を、竹窓のあいだから、じつと、家の中へしのび入れた。

病人は、干し鰯ほがれいのように平たくなって、昏睡こんすいしていた。枕元には、煎じ薬せんぐすりも見えない。うす寒い空気と壁があるだけで、台所にも、一粒の米粒すらなさそうである。

豆絞りの手拭から、ころりと、百両包を二つ出して、竹窓のあいだから、手をさし入れて、小壁の下に置いた。そして治郎吉は、

路地を出て来た。

「……あつ、ごめんなさいまし」

暗かった。

それに、お喜乃は、うろたえてもいたし……。

どんと、治郎吉の胸にぶつかった弾はずみに、手に持っていた封金を溝板どぶいたのうえに落した。治郎吉は、拾い取つて、

「これだろう」

と、渡してやった。

「有難うぞんじます」

「病人があつたり、悪い親切に取とツ憑つかれたり、おまえさんも、たいていじやありませんね」

「え？」

と、眸をこらして、

「どなたでございますか」

「ちつとばかり、お前さんを、知ってるものさ」

「どなた様でしょう、思い出せませんが」

「いつぞや、自雷也床で」

「あ、あの時の」

「よけいな差し出口をするようだが、その金は、費<sup>つか</sup>っちゃいけね

え」

「え、今も、追いかけて行って、お返ししようと思ったんですけど、もう姿が見えないんです」

「あつしが、その金は、彼奴あいつに返して上げましょう。また、どんな金の要り用があるのか知らねえが、芸妓げいこに出るなんて、まずい智慧も思い直した方がようがすぜ」

「ご親切に」

と、お喜乃はもう涙ぐんでいる。

いかに、温かさに、飢えているかがわかる。治郎吉は、もつと、もつと、優しいことばを与えたかったが、何だか、お仙や、売女にいうように、すらすらとことばが出なかった。

「どうしてそんなに金が要るんだね。病人の薬代にしちや、すこし、多寡たかが大きいが」

「すこし、事情わけがございました」

「あの大病人をおいて、芸妓に出ようという決心をするくらいだから、よくよくだろうとは察するが」

「実は、父が浪人したもとの御主人様へ、年に八十金ずつ御返済するお金があるのでございます」

「もとの主人へ返す金なんか、浪人した以上は、どうでもいいじやありませんか」

「そうは行かないお金なんです。父の落度のために、その旗本の御主人も、御番頭ごばんがしらやら同役のお方たちから、千何百両という大金を立て替えていただいて、一時、公儀のお帳面の表を埋めてあるのでございますから」

「じゃ、おまえさんたちは、江戸にいたのかい」

「丹後町の、脇坂佐内様わきざかさないというお旗本の用人を勤めておりました」

「で、その主人が、公儀のお納戸金か何かを遊びに、費つかいこんだというわけだね」

「いいえ、脇坂様は、御普請方ごふしんをしておりますところから、永代橋のお架かけ替かえに、職人達へ支払う公金を、たった一晚、お屋敷の土蔵にとめておいたのが間違いだったのです。どうしてそれを知ったものか、その晩、鼠小僧という賊がはいつて、盗まれてしまったのでございます」

「へエ……」

治郎吉は、寒くなつた。

「鼠小僧？」

「すごい泥棒だそうで、父が、寝ずの番をしていたのに、千両あまりの金を盗んで行くのに、音もしなかったと申します」

「……ふうむ」

「つまらない愚痴を申しあげました」

「だが、年に八十両ずつ返しても、十年以上かかる。これから先、どうするつもりだい」

「父が丈夫なうちは、どうじま堂島へ出て、こめあきな米商いをしていました  
が、それも、相場に焦心あせつて、資本もとも子も失くしたうえ、あの重病でございますから、これから先は、私が、芸妓にでもなつて一心に、働けるだけ働くつもりでございます」

「じよ、じようだんいつちや、いけねえ」

と、お喜乃の世間知らずに呆れたが、決して嗤わらう気きにはなれなかつた。

「芸妓をして、千両稼ぐうちには、おまえさんが婆ばばあになる。——

ま、とにかく、家へ帰けえつて考えなせえ。そして、この金は、さつきいったとおり、俺の手から、先へ、返してやろう」

「でも、他人ひと様の手からでは」

「おれを、疑うのかい」

「そんなことはございせんが」

「じゃ、心配しねえで、預けなせえ。こう見えても——」と、いかけたが、治郎吉は気がさして、きれいなことがいえなかつた。

寒い。いやに、背すじが寒い。

往来を斜めに切つて、向う側から、振り顧ると、路地のかどに、白い顔が、まだ立っていた。

はらちがい

窓の戸を閉めようとした時、お喜乃の足の指に、ふたつつみ 二一 包の金  
が触った。

びっくりして、唇のいろが変った。二百両である。——誰が？  
と胸がわくわくした。

「ああ、きつと、先刻さつきの人が……」

と、思わず心のうちで拝んだ。何となく、さっきの言葉にも、情があつた。父を起して話そうかと、昂奮した気もちにもなつたが、病人の寝顔を見て、黙つて、柵のうえに乗せて、眠りについた。

彼女はいつまでも寝られなかつた。路地の暗がりで見えた男のすがたと、二包の金が、眼について寝られなかつた。そのうちに、頭が思案につかれて、眠りに落ちた。

——もう明け方。

何か、冷たい手にでも撫でられたような気がして、ふと、眼をあけると、うつつな、渋い網膜もうまくに、大きな人影が映つた。絞りしぼの手拭で、頬ほお冠かむりをして、壁の下を、這つてゆくのであつた。

「おやつ？」

夢中で、彼女が、ふとんを<sup>は</sup>刎退けたとたんに、男は、ぬつと立って、裏口へ飛び出そうとした。だが、その<sup>はず</sup>弾みに、病人の枕に<sup>けつま</sup>蹴躓すいたので、気丈な、彼女の父は、自分の病体をも忘れて、

「誰だッ」

と、賊の片足をつかんだ。

いきなり、青い針金のような光が、賊の手元から走ったと思うと、ばすツと、生れてから聞いたことのない異様な音が、お喜乃の耳を<sup>う</sup>衝つった。

「あつ！ ……お父さん」

飛びついて、無我夢中に抱えこんだ時には、もう、父に<sup>いき</sup>呼吸いきは

なかった。温ぬるい、むず痒かゆい、虫のように生きてる液体が、どこか  
らともなく噴き出して、彼女の手に、膝に、ふとんに、気の遠く  
なるほど溢れた。

「血だッ」

彼女は死骸と共に、倒れながら、初めて大きな声でさげんだ。

「——来てくださいッ。御近所の方。父が殺されました。父がッ

……父が」

血のなかに、お喜乃は、泣き転んでいた。

そして、夜が明けてみると、二包の金はなかった。

× × ×

「金が子を生む？ 金が子を生んだ」

店を、したぞり下剃の松にまかせて、仁吉は、独りで二階に上がって  
いた。

両方の掌に、百両包を、一つずつ乗せて腹ン這いに寝ころびながら、猫がまりもてあそ鞠を弄ぶように、

「ふしぎだ、金が子を生んだ」  
と、眩いている。

「たしかに、一包の金が半夜のうちに二包に化けていやがるから、ちよつと、呆れてものがいえねえ」

包のこぼを、歯で破つて小判の山吹色をのぞいたり、めかた目量を手で計つてみたり、独りで、首をかしげ、錯覚を起し、そして、妙な幸運さに、陶醉をしている。

ぎしつと、梯子に跫音がしたので、彼は、あわてて、金を、欄ら間の額んまがくのうらへ隠した。

「誰だツ」

妙に、尖つて云つた。

——と、消え入るような声で、

「わたし」

「わたし？ ……あ。お仙じゃねえか、てめえは」

「兄さん」

お仙は、間がわるそうに、そして力のない肩を落して、そこへ坐つた。

「……こんにちは」

「どうしたんだ、お仙。すっかり痩せこけてしまつて、見違えるようだ。榎屋つちやでも大変な騒ぎをしたらしい。おれも、心配していたところだ」

「有馬から、何か、いつて来ましたか」

「あたりめえだ。送つて行つたまま、旅の客といつしよに逃げしまつたんだというじゃねえか。とんだ浮気をしやがつて、男に捨てられて来たんだらう」

「兄さん、私が逃げたのは、それだけの理由わけじゃありませんよ。おまえだつて、あまりじゃないか。人の身体を何だと思つてるのさ」

「む、守口へ、おめえを身売りの一件か。……実あ、その事なら、

少しほかで工面ができたから、まあ当分は間に合うよ」

「当分は間にあつても、お金につまるたんびに、私の身体をあてにされていちやたまらないよ。——きようは、その入り用の百両を上げますから、これツ限り、兄きようだい妹だいの縁を切つてくださいね」

「なに、百両持つて来た？」

「え。縁切り金」

と、お仙は、帯のあいだから、それを出して、

「切る？ 切らない？」

「べら棒め、兄きようだい妹だいの縁なんざ、望みとあれやいつでも切つてやらあ」

「じゃ、くれてやるから、これっ限りだよ」

ほんと投げて、それでも、涙でいっぱいになった眼をそむけながら、梯子段を下りて行こうとすると、

「やい。お仙、ちよつと待てよ」

「なあに？」

「てめえ、この金を、どこから持って来たんだ」

そういった仁吉の掌は、落せば爆発する火薬玉でも乗せたように、百両の封金をふたつの手に持って、蚤のみの顔を調べるような眼で、封の目や、紙の手摺てずれなどを、じつと見つめていた。

「どこから持って来たツてんだよ、この金を。——ま、ちよつとそこへ坐れ。訊かねえうちは、受けとれねえ」

お仙は、坐り直して、

「貰ったのさ。世の中にや、妹の体を食い物にする鬼ばかりはいないからね」

「誰に貰った」

「お客ときまっているじゃないか」

「というと、てめえと、ずらかった相手の男だな」

「そうよ」

「おかしいなあ……」と腕を拱くんで、じつとお仙をするどく睨みながら、「もしや、てめえは、その男に何かふくませて、俺の家へ、様子を見させによこした事がありやあしねえか」

「あつたかも知れない」

「畜生」

仁吉はいきなり、用よう筆だん筒すにとびついて、がたがたと抽ひき斗だしを鳴らして、四ツに畳んだ人相書をそこへひろげた。

「お仙、てめえの男は、こいつだろう」

「……………」

お仙の眼は、兇状廻しの人相書へ、惚ほ々れと吸すわれていた。胸のなかには、すぐその男の声や、冷たさや、強さや、いろいろな感情が脈を搏うってひびいてくる。

「これだな！ よし、分った」

と、妹の顔いろを読んで、

「てめえ、帰ると承知しねえぞ、禁足だ」

「縁を切ったおまえから、足止めをされるおぼえはない」

「ばかッ」

いきなり、立ちかける腰を擦さすつて、

「こいつ、どうかしていやがる。盗ッ人に惚れるやつがあるか」

「大きなお世話じゃないか」

「降ろさねえぞ、この梯子段から」

「帰りますよ、御勝手に」

「松ッ」

と、下へ怒鳴った。

「——手を貸せ。はやく上がって来い。この色情狂をふん縛つて、押入のなかへつないでおくんだ」

やけかご  
自暴駕

「二階の雨戸を閉めておけ。可哀そうだなんて思つちやいけねえぞ」

下剌の松に吩咐いいつけると、仁吉は、ひどく忙しい用事でもあるように、出て行つた。

間もなく、彼のすがたが、天王寺裏の路地へはいつて行つた。

長屋の人たちが、口もきかずに、出はいりする様子や、近所の囁きなどを不審そうに見廻しながら、お喜乃の家の門に立って、

「おやつ。何かあつたんですか」

と、首を突つこんだ。

奥には、七、八人、長屋の者が集まって、畳を代えたり、仏事の道具をならべていた。

「あ、自雷也床の親方ですか」

「お喜乃さんは」

「おります」

「一体、どうしたんで」

そろそろと、上がり込みながら、

「じゃ、昨夜ゆうべのうちに、御病人の容態でも変ったんですか」

「なに、それならまだ諦めようもございしますが……」と、長屋の人々は、沈鬱ちんうつに、ひとしく首を垂れて、

「可哀そうに、こんな家へ、泥棒がはいつて、斬られなすつたん

でございます」

「えっ、親父さんが」

「はい」

「ほ、ほんとですか」

「お喜乃坊が、かあいそうでござんす。な、なんていう、運の悪い娘こでしょう」

肅然として、みんな嗚咽おえつした。——仁吉も、拳を膝に突つ張つて、眼をしばたたきながら、

「そうですか——」と、息をふかくついて、「するつてえと、ゆうべ、あつしが帰つた後ですね」

「もう明け方に近かつたそうです」

「ふてえやつだ。病人を斬り殺すなんて、憎んでも憎み足りねえ畜生だ。……ああ、だが考えてみると、その種は、あつしが蒔まいたようなものだ。実あ、皆さんの前ですが、ふだんからお喜乃さんの心ばえに感服して、さるお武家から、大金を戴いてやつたんです。それをゆうべ届けたんで、盗ツ人のやつに見込まれたのかも知れねえ」

「長屋中で、どうにかして上げるつもりではおりますが、何しろ、幾ら寄つても、貧乏人と貧乏人、お寺への心づけさえないんでしてね」

「心配しなさんな」

すぐ財布を解いて――

「一両と、小粒を少しばかり持ち合わせていますから、これで万端」

「あ、親方さん……」

棺桶のまえに泣き伏していたお喜乃が、あわてて、それを押しやって、

「もう、そんな御心配は」

「お喜乃さん、飛んだことだったなあ。おめえの心のうちは察する」と、ほろりと声を落して、

「だが、力を落しなさんなよ。及ばずながら、後々は、どうにでも、相談相手になってあげる」

「ほんとに、御親切な親方だ」

と、長屋の人々は、いい囃はやすように――

「どうぞよろしくお願いいたします」

「ご検視は」

「はい、今し方、すみました」

「何か、泥棒の、証跡になるような物は」

「窓の外に、手拭が一本落ちていただけだそうで」

「え、手拭」と、思わずふところへ動きそうな手を、膝へつき直して、

「どんな手拭が？」

「豆まめ絞しぼりの」

ほっとしたように、

「それっ限りきじや大した手懸りにもなるまい。ことによると、こいつも、鼠小僧の仕業しわざかも知れませんぜ」

「鼠小僧というのは」

「江戸を荒した大泥棒で、なんでも近頃は、上方へ立ち廻つてい  
るという評判だ。方々の橋袂にも、この二、三日、人相書が出て  
いるはずだが」

「あ、そういえば、いろんな噂がありますね」

「とにかく、後々まで、御相談になりますから、こここのところは、  
諸事よろしく皆さんにお願い申します。ちようどきようは、町方  
の用向きをもつて、西与力の重松左次兵衛様のお屋敷まで何うこ  
とがあつて、先を急ぎますから」

と、下駄をはきかけて――

「お目にかかったついでに、重松様に、一日も早く下手人が捕あげられるように、よくあつしからも頼んでおこう」

路地を出ると、仁吉はあたふたと急ぎ出した。駕籠をとばして、その足で、与力町の重松左次兵衛を訪ねた。

「旦那、ひよんなことが持ち上がりましたぜ」

左次兵衛は、暗あんうつ鬱うつな顔をして、脇きょうそく息そくから、庭を見ていた。

「なんだ、ひよんなこととは」

「お喜乃の親父が殺されたんで」

「殺された。――病人のはずじやないか」

「押込みに斬られたんです。ゆうべ無理に百両置いて来たのが、

かえって仇になっちまいました。——だが、親切の効き目は、こういう時じゃねえでしようか」

「もう百両出せというのか」

「何しろ、盗まれちまったんで」

「ない」

と噛んで吐くように、

「月でも変つて、蔵米でも払わなければ、拙者も、一文もない」  
ひどく不機嫌な顔いろに、仁吉は、口をつぐんで、

「へ……」

と、頭を下げた。

「恥をいわねば分らんが、実は、拙者も、盗賊に遭つて、文庫の

金を悉しつかいさら皆攫さらわれてしまった」

「えつ、お屋敷へも」

「む。貴様に送られて帰った晩だ」

「旦那、あつしじやありませんぜ」

「誰がそちだといった。——何しろ当惑している」

「それや御災難でございましたね。下手人の見当はついているんですか」

「分らん。雑ぞうきん巾で拭いて行つたようだ」

「——じや、どうしましょう、お喜乃の方は」

「どうとは？」

「ここんところで、もう一度、金をやるかやらないかの思案で」

「金をやらずに、お喜乃を手に入れる工夫をしろ。来月になれば、  
どうかならうが」

「じゃ、やっぱり、新町へ突つ転ばすに限りませぬ。——ム、そ  
いつに限る、いったん芸妓げいこに出れや、あとは、本人の意志よりは、  
金次第、取り巻き次第というわけになりますから」

「何とかいたせ、何とか」

「抛ほうつておいても、そうなるでしょうが、後始末のつき次第に、  
ひとつ、責めてを変えてみましょう」

「貴様、案外、役に立たんな」

「恐れ入りました。きようは、御機嫌がわるいようで」

「飲もう、一つ」

また、新町へであつた。自暴やけのやん八で、駕籠が飛ぶ。

## 後の月

天保山の磯茶屋から、月見舟がたくさん出る。酒をつんで、妓おんなをのせて、川尻の漕標みおつくし木のあたりまで浮かび出るのである。

十三夜の晩だつた。水の上では、もう息さえ白く見えそうに薄ら寒かつた。

磯茶屋を離れた二艘の月見舟がある。与力の重松左次兵衛と、自雷也床の仁吉を客に、仲居や新町の妓たちが、月げっさい釵をかがやかせて、幾人か、乗っていた。

そのうちに、諜しめしあわせてあつた事とみえて、一艘は、ひとりの妓おんなと、仁吉と、左次兵衛だけをのせて、末広橋から海の方へ、離れはじめた。

「あ、船頭さん、戻してください。連れの方へ」

妓おんなは、水が怖いのか、ふるえながら、遠さかる連れの舟へのび上がっていた。——この秋、紅梅から出た、淋しい新妓しんこだった。

「お喜乃さん、怖がるこたあねえよ。月を見ながら、今夜あ、住吉あけぼのの曙へ行って泊るのさ。紅梅家でも承知のうえだから、案じなさんな」

お喜乃は、罨わなに落ちた自分を知った。手をかさねた舷ふなべりへ、がつくりと、額をつけて、肩をきざいで、泣いていた。

「——ずいぶん、今夜までに手間がかかったぜ。とうせ、水稼みずしよ業うばいにはいった体じゃねえか。いい加減に、世間なみになりねえ。さ、盃をやろう。そして、きげんを直して旦那に一つ酌さしてくんねえ。一度は、そうしてくんなくつちや、どうも、この仁吉の面つらも立たねえから」

「……………」

「え、おい」

「……………」

「お喜乃…………ちツ」

と、仁吉は、癩かんを起しかけたが、じつと慄こらえて、

「強情だな。酒ぐらい飲むもんだ。さ、気を直しな、盃だけでも

取つてくんな」

お喜乃が、肩を外したとたん、ちりんと、盃が、舟ばたに躍つて、水の底へ、沈んで行つた。

「これだ……」

と、白い眼を、左次兵衛に振り向けて、

「旦那、精がつきましたよ」

左次兵衛は、ぐび、ぐび、と酒ばかり重ねていたが、仁吉の眼<sup>め</sup>交<sup>ま</sup>ぜを、苦々とうけて、

「船頭」

と、艦<sup>とも</sup>へ呼んだ。

「へい」

「ちよつと、その辺の岸へつけて、暫時、陸おかはずへ外はずしていてくれな  
いか」

黙々と、そして緩やかに、艀をうごかしていた船頭は、  
頬ほ冠おかむりをした手拭の耳に、ひらひらと風をうけながら、

「あつしに、陸へ上がっているというんですか」  
と、訊き直した。

「そうだ。——少し混み入った話があるから」

「嫌だ！」

「なにッ」

「嫌なこツた」

「これっ、船頭の分際として、客のいいつけをきかぬという法が

あるか。船をつけろ」

「笑わしやがる」

豆しぼりの手拭が、つばさをひろげて、波の上へ飛んだ。

治郎吉だった。

「こうお喜乃さん。落ちるとあぶねえよ。臚ともへ来て、おれの足に、

しがみついているがいい」

「やつ」

仁吉は、恟ぎよつとしながら飛び退のいて、

「てめえは、鼠小僧だな」

「む」

と、治郎吉は、盗ぬすッ人とにありそうもない笑えくぼ靨ぼを見せて、

「感心に、てめえも、知っているか。——おおあにき大兄哥の面をよく見ておけ」

とたんに、左次兵衛は、羽織を脱いで、舟から水面へ躍りこんだ。岸へ向つて、泳ぎ出したのである。

「しまった」

と、治郎吉は舌打ちをして、

「仕事は急がぎなるめえ。やい、自雷也」

どこに置いてあつたか、道中差を、抜くよりはやく、ふりかぶって、

「命はもらつた！」

ばつと、風を割つて落した。

かつんと、仁吉の膝がしらに、石でも割れたような音がした。

二度目の刀は、肩さきへ来た。仁吉は、尻もちをつきながら、いくち首で月光を斬った。あ

「——ひッ、人殺しだあつ」

絶叫が、月の安治川あじかわから、海へ走った。

「けッ、女々めめしい声を出しやがる。病人を斬って逃げ出すような、ケチな盗ッ人ほど不愜ふびんなものはない。せめて、俺ぐらいにあやか  
るように、もう一度、生れ直して来い」

五ツ六ツ、撲るように刀でたたくと、仁吉の体は、魚の臓物の  
ように、船底に俯うつつ伏ぶして、声も音も消してしまった。

白い月と、川波と、そして、お喜乃の銀ぎん釵さいが、かすかに、ふ

るえているばかりである。

ざぶりっ、と舷ふなべりから手を洗って、

「あ、もう来やがった」

と、治郎吉は、帯を締め直した。

船番所が近いので、案外に早かった。蕭しやうじやう条じやうたる蘆あしのあいだを、捕手の灯が、いっさんに岸へ廻りはじめている。

「まごついちやいらねえ」と、死骸を蹴落して、艀ろをつかんで、  
「お喜乃さん、何処へ送ろうか」

「……もしっ」

ふいに、盲目的に、彼女は、治郎吉の裾にすがりついた。

「どこへでも」

「えっ」

治郎吉は、躍るような快感と、満足に、思わず口走った。

「ほんとにか」

——だが、彼はすぐに考え直した。

「いけねえ、いけねえ。おれは気まぐれもんだ。いつまた飽きが来ねえとも限らねえ。仕置場の空に眼を塞ぐ最期にだつて、生涯のうち、一つぐらいは、きれいな憶い出がねえのは淋しい。十三夜の晩だけを覚えて、おめえとは、このまま、別れることにするよ」

「……………」

お喜乃は、何もいえなかつた。氷の中の花のように、凍ってい

た。

「達者でいねえ」

——十三夜だ、後の月だ、治郎吉は、こんな月は、生れてから、見たことがないと思つた。

「おれも、もう少しや、生きているぜ。そうよ、俺の稼ぎは、金じゃねえ、自分の寿命を稼ぐようなもんだ。——そして、きつとその間に、脇坂佐内の土蔵の中へ、千両だけは返してやるぜ。父さんへの手向けだ。——じゃあ、あばよ」

「あつ、待つて！」

お喜乃は、飛沫をあびて、わつと、泣き倒れた。治郎吉の影は、もう、水面の下にかくれて、ただ一すじ、波の影だけが、北岸の

方へよれて行つた。

また泥棒がはいった。

しかも、仁吉が、安治川のもくずになつた晩に、その仁吉の家に、はいった泥棒である。

階下<sup>した</sup>では、まだ弟子の松が、常連を相手に将棋<sup>した</sup>をさしていた。

——で物干しから用心のない戸を開けて、こんばんはといいたいくらい、楽々と、二階へはいつて来た。

むろん治郎吉である。藍<sup>あい</sup>みじんは、袂<sup>たもと</sup>も裾も、ぐつしよりと濡れていた。用<sup>よう</sup>筆<sup>だんす</sup>筒<sup>す</sup>の抽<sup>ひき</sup>斗<sup>だし</sup>や、そこらの間を、かた、こと、といつている間に、欄<sup>らん</sup>間<sup>ま</sup>の額<sup>が</sup>のうらから、手もつけない三つの封金を見つけておかしくなつたように、口を押えた。

「あいつの着物じゃ、ちつと、気色がわるいが、間にあわせだ、何かあるだろう」

咳きながら、押入に手をかけて、四、五寸、開けたとたん、彼は、胆をつぶした。

「あつ、治郎吉さん！」

「シツ」

絞め殺すように、そこにいた、お仙の口を押えつけて、

「おめえは、こんな所にいたのか」

「連れ出しに来てくれたんですか。欣うれしい！ ああ欣うれしい！」

お仙は、泣いて喜んだ。彼の膝へ、顔をこすりつけて、縛られている体を、押入の中から這わせた。

「さ、はやく、連れて逃げてください」

「待ってくれ、おらあ、おめえを救いに来たわけじゃねえ。この家の総勘定をつけに来たんだ」

そんなことばは、お仙の耳にもはいらなかつた。

「何でもいいから、縄を解いて、外へ出してください。私はもう、この世の中に、おまえさんよりほかに、頼る人はないんだからね、治郎さん」

「おめえは、まだ俺に、懲こりねえのか」

「どんな苦勞をしてもいい」

「なるほどなあ、おめえにもいい所がある。それは、いつ捨てても、大して、悪い気がしねえことだ。きつと、俺はまた、おめえ

を捨てるぜ」

「見捨てないで下さいよう、見捨てないで……」

そういいながら、お仙は、治郎吉に解かれた縄をふり払って、物干しから、屋根へ、怖さも忘れて這い出したけれど、裏口はもう真つ赤に染まるほど、御用提灯ぢようちんうずが埋もっていた。

「あつ、治郎吉さん」

と、座敷を駆けぬけて、表窓を開けてみたけれど、治郎吉のすがたは、そこにも見えなかった。

太左衛門橋も、河の中も、ただ灯である、軽装した捕方の影ばかりである。



# 青空文庫情報

底本：「治郎吉格子 名作短編集（一）」吉川英治歴史時代文庫、  
講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2003（平成15）年4月25日第8刷発行

初出：「週刊朝日 秋季特別号」

1931（昭和6）年

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 治郎吉格子

吉川英治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>